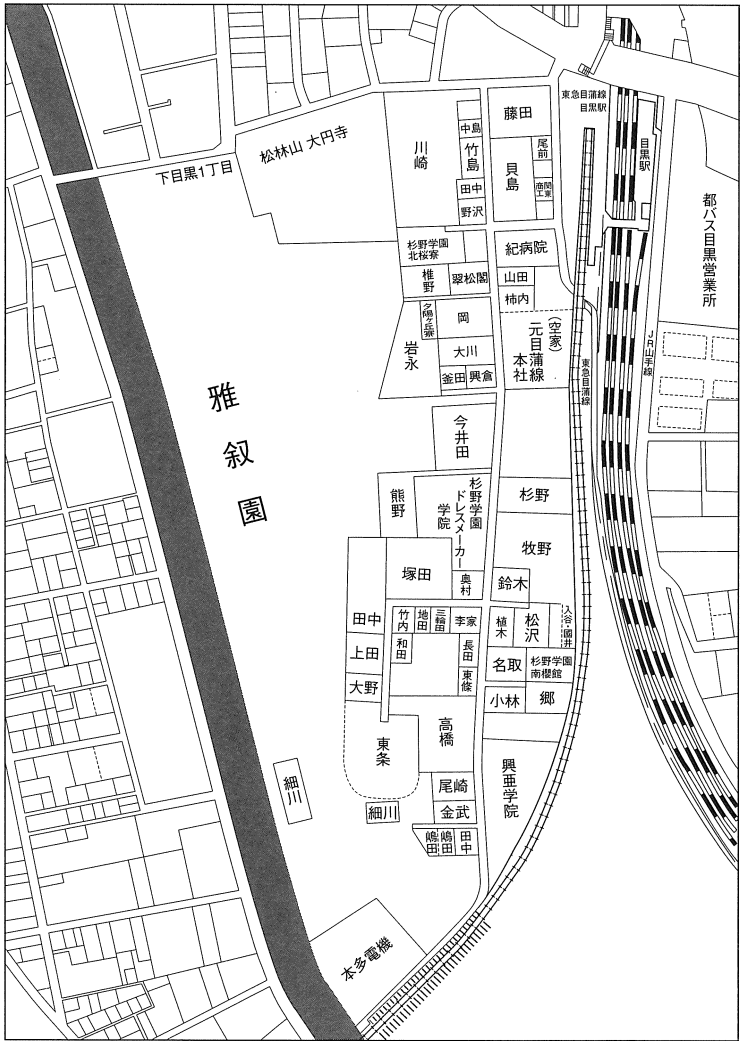


第2章

夕陽丘人物伝



戦前の夕陽丘

登山家、今井田研二郎

登山家の今井田研二郎は、目黒パークマンションの建っている所にあった洋館に住んでいました。

以下に掲載したのは彼が高校生のときに登った春山の記録です。このルートは、大学山岳会が開拓したもので、第三登ですが、日によって大きく違い、アレートは凍り付いて、人を寄せ付けず、大変なアルバイトをして粉雪で膝までもぐるルンゼを登った。曇天で雪が融けず、雪崩の危険が無かったことがさいわいした。

(奥村一郎)

春の前穂高を登攀した高校生

昭和三年四月二日、松本高校山岳部の国塩(今井田)研二郎(九文甲)と内山秋人(十理甲)は午前二時に起き、四時に上高地の清水屋を出発した。河童橋からスキーを穿いて、ランタンを頼りに沢を登る。高みから振り返ると、上高地の谷にはどす黒い雲が足早に流れている。空は陰

鬱に曇って、雲が峰峰をすっかり覆ってしまふ。

八時、岳川谷の最奥に達する。夏道の沢より一つ明神よりの大きな沢を詰めて、ルンゼ（溝状の急な谷）の入り口の蒼氷の上にスキーを雪崩を恐れて白樺の幹に縛って置く。

この谷は薄いクラスト（氷の殻）の下が粉雪で膝まで潜るので、大変な労力を要する。

約二時間余りルンゼはY字形に別れる。左にルートをとリ、益々傾斜の強くなった斜面を、粉雪の中を登る。一つの足場すらいい加減にもされぬ。かよわい憐憫に頼る自棄を少しも許容しない場合である。全力を



2月の前穂高

以って最善をつくす以外に道がない。そこに信念がある。尊い生命の燃焼がある。強き歩みはなおもアレト（痩せ尾根）へ。頂へ。そして最後の鋭い氷のアレート（トラヴァース（横這い））。一歩一歩、ピッケルを閃

かしながら登路を切り碎いて行く。氷と雪とが淋しい音を立てながら深い谷底に飛んで行った。

突然、ガスの中にポツカリと頂が浮いた。

十一時。遂に私達は頂に達した。前穂まことの頂は雪に積み上げられた高まりであった。晴天であるなら雪の山々の大観を得たことであろう。深いガスに私達は何も望み見る事は出来なかった。でもいゝ、私達は遂に頂にたったのである。ほほえみを交しながら友の手を無言で握りしめる。余り人の触感を知らないこの頂の氷雪が、今はどんなにか親しいものとなった事であらう。僅かに頭を出した標柱をじっと見つむる心。山登りの生活にかけがえのない貴重なひととき。

「帰ろう」

五分の後私達は頂を去った。忠実に切り碎かれた踏み跡を辿る。アイゼンの爪の間に粉雪のつまるのを注意しながら、確実に下へ下へと急ぐ。私達の忠実なスキーのもとに帰ったのは約一時間半ばかりの後であった。重い心がホツとする。そして急に空腹が感ぜられる。昼食を取らう。黒パンとハム。そうして温かいココアがわかされる。パイプの紫煙がゆ

るやかに立昇る。谷には甘い静けさがただよってゐた。激しいアルバイトの後の怠惰なエクスタシー。こんなにも大きな幸福がどこにあらう。街々の雑踏の中にこうした落ちついた幸福をどんなに待ち設けてゐた事か。今こそ、それが余るほど償はれたのである。胸がすくやうな涙ぐましい山の陶醉である。

一時間ほどの後、スキートの先端が下に向けられた。ここからはもうスキーと二本のシュトックで事足りる。もう先頭は豆のやうに小さくなっている。直線から曲線、素晴らしい滑降である。そしてタンネの間を馳走する直滑降。何時の間にかもう私達は河童橋のたもとに来てゐた。そして清水屋までの道が今日はいちにたく短く思はれる。

「行つて参りました」

誰かれとなくそう呼びかけたい気持。とうとう私達は大きな目的をなしとげたのである。かかへ切れないこの喜びである。今宵は祝いのものでも飲みながら、いろいろのそばで、激しい一日のアルバイトに鋭がった神経を休めやう。

貴族院議員、岩永祐吉

初代衛生局長であった長与専斉の四男の祐吉は、一八九〇年（明治二十三年）母方の叔父岩永省一の養子となった。岩永省一は日本郵船の専務であった。岩永省一は後藤多仲の次男として長崎に生まれ、岩永家の養子となった。

慶応義塾に学び一八七〇年（明治三年）留学生として英米に遊学、帰朝後は三菱会社に入り、一八八五年郵船会社に転じ一八八九年専務取締役となる。一九一一年に病で職を退くまで海運事業に従事する事二十年、業界に貢献するところ甚だ多かった。一九一三年（大正二年）没、享年六十二歳、勳四等に叙せられた。

祐吉は恵まれた家庭でのびのびと育ち、麻布小学校（一時養父母の西片町から誠之小学校に通ったが、寂しがるので生家に戻った）から正則中学校を一九〇〇年（明治三十三年）卒業した。しかし学力不足のため、一高は二浪して入る。

一高時代は柔道に熱中して落第、そのため人の倍の同級生、鶴見祐輔、前田多門、有田八郎、小宮豊隆、中勘助、下条康麿、十河信二、丸山鶴吉、野上豊一郎等を持つ。

大学は京都帝大。卒業時の高文試験も不合格。しかし浪人中に心の師を得た。内村鑑三と新渡戸稲造である。彼の「ノブレス・オブリージ」は二人の師によって磨かれた。京都帝国大学を卒業したのが明治四十二年七月、高文合格は一九一〇年（明治四十三年）秋（二十七歳）であった。同年十二月恋人鈴子と結婚、翌年一月満鉄大連本社）に入社し全身全霊をもって職務に励んだ。

一九一七年（大正六年）に満鉄を辞め、鉄道院総裁・後藤新平の秘書官となったが、翌年に辞めた。自由の身となり、この機会に外国の事情を見てしようと、十一月に香取丸でアメリカに渡った。シカゴで後藤新平一行と会い、一緒にヨーロッパに渡った。ちょうどパリは講和会議に沸き立ち、生々しい大戦直後のヨーロッパ諸国をつぶさに見て廻り、豊かな新しい知識を吸収して再びアメリカを経由して帰国した。この一年の両大陸の見聞こそ岩永祐吉の一生を決定するものとなった。

帰国の洋上で「大戦によって世界は大きく変わりつつある。この一大転換期にのぞんで、真に国民の耳となり口となつて日本を全世界に語り、また、世界を全日本に伝えるという仕事こそが、日本の地位をいよいよ向上させるのだ。この仕事こそが緊急にして重要な国家的使命である。その仕事は俺がやりとげてみせるぞ」とかたく心に誓つたのである。

一九二〇年（大正九年）の春、愛国生命の裏側の狭い室で「岩永通信」を発行し、「世界の批判」に発展し、売れ行きは好調であった。大正十年に夕陽丘に二階建の洋館を建てた。省一氏が一九一三年（大正二年）に死去して、受け継いだ遺産は百万円といわれたので、欧米に習つて自宅での社交を考えたものだと思われる。

一九二五年（大正十四年）に省一氏追善のため、小さな学生寮（十五人収容）を作つた。その寮長、福田一はこう述べている。

「夕日が丘という山と目黒川をさしはさむ地域一帯の約二万坪の土地に、丘の上の洋館に裕吉夫妻が住み、麓の数奇屋造りの豪壮な邸宅（省一氏が明治三八年に本郷曙町から移築、明治四十五年、コンドル設計の洋館の離れを増築）には、養母が病を養つていた（大正十五年に死去）」

「岩永通信」は一九二三年（大正十二年）九月一日の関東大震災で発行不能になり廃刊したが、その後「国際通信社」の専務となり、昭和元年「国際通信社」解散、「日本新聞聯合社」設立、専務となる。「ロイター」と交渉の末、不利な契約を改定するなど活躍し、ロイターとAPとの争いを調停するなど国際的信用の絶大なことを示した。一貫して通信事業に対する熱意は私財をなげうって行われ、一時は投資額百万円に達したという。

一九三六年（昭和十一年）「同盟通信社」（戦後、共同通信社と時事通信社に分かれる）を設立、社長となる。一九三八年（昭和十三年）貴族院議員に勅選、一九三九年（昭和十四年）九月二日狭心症で死去。享年五十七歳。日本の国際化に一生を捧げた巨人が去り、日本はとどめなく戦争に突入した。

余談「ゴルフと裕吉」

一九二九年になって、日本にもようやくゴルフが定着し、本格的なコースが欲しいとの声に、イギリス留学から帰った西本願寺の大谷光明が中

心になって、折からロンドンにいた岩永裕吉に本場の一流設計家の招聘を打診した。岩永氏がかねて面識のあったゴルフ狂の政治家アーサー・バルフォア卿に話をもちこんだ。

「ためらわず推挙できるのは、いまハリー・コルト以外にいない。私が紹介する」

ようやく巨匠と面会できたが、コルトは六十歳、日本までの船旅が長すぎると断られたが、代案として助手のアリソンの派遣を提案した。

一九三〇年に来日したアリソンは四十八歳、一八〇センチの長身の中折れ帽に三つ揃いの背広が似合う静謐な紳士だが、来日翌日から駒沢と埼玉を視察した。毎日長靴で歩き回って、設計にいそしんだ。彼がコルトに匹敵する設計家だと判って、各地から依頼が殺到した。その最初の仕事の朝霞は今はなく、設計は広野、川奈富士、鳴尾、霞ヶ関（東）に残されている。「アリソン・バンカー」に名を残した偉大な設計家であった。

（奥村一郎）

【注】「アーサー・バルフォア卿」（1848～1930年）は1902～05年に首相、戦時内閣海相、戦後外相（その時ユダヤ人がパレスチナで建国できるという歴史的なバルフォア宣言を出す）。1921～22年にワシントン軍縮会議のイギリス代表、当時は枢密院議長。

初代町会長、大川周明

大川周明（一八八六一一九五七年）は山形県生まれで、熊本五高を出て東大でインド哲学を専攻した。たまたま英国のインド経営の書に触れて以来「アジア大陸には白人に蹂躪されていない土地もなく、奴隷とされていない民もない」ことを知り「十年前出家遁世しかねなかった、ひたすら求道の一学徒はいまは拓殖大学で植民地史を講じ、武侠の魂を抱いてアジア復興を生命とする一戦士となった」（自伝）

一九二九年（大正八年）にアジア復興の同志と「猶存社」を設立した。北一輝を上海から迎え、「純正社会主義」をもって、日本の国家を改造するという北の国家改造論と、国際的には現状維持勢力の不正義を武力をもってしても糺すというアジア主義的思想が一体となって、昭和の革新思想の原型が完成するのである（岡崎久彦『重光・東郷とその時代』PHP研究所）。

五・二五事件（昭和七年）で首謀者に拳銃・資金を提供して幫助罪で下獄し、二・二六事件（昭和十一年）は入獄中で関わらず、一九三七年

(昭和十二年) 出獄した。その前後に夕陽ヶ丘に移住したと思われる。一九四〇年(昭和十五年)に出版した『皇国二六〇〇年史』が大ベストセラーとなったので、この家を買取ったのかもしれない。

一九三七年(昭和十二年)からいまの杉野学園の短大の所に「興亜学院」を設立して校長となり、夕陽会の町会長を兼ねた。長身白皙のロイド眼鏡の紳士で、行き逢うとお辞儀をしたくなるような威厳をそなえていた。表の通りを興亜学院の生徒が、木銃を担ぎ昭和維新の歌「汨羅の淵に波騒ぎ、巫山の雲は乱れ飛ぶ……」と歌いながらザッザッと行進していった。一転して敗戦後、戦犯となった周明は戦争裁判で東條元首相の頭をピシャピシャ叩いて、世田谷松沢の精神病院に入り、そのまま釈放されて、茨城に隠退したが、「コーラン」を翻訳し、著述を行った。それらの著述は理論的にも優れているようだ。

杉野学園が大川邸(望雲寮)の建物を買って、取り壊したとき、床の下から、刀、短銃等が出て、新聞のニュースになった。私とあまり年の違わない興亜学院の生徒達が、その後どうなっただろうと考える時もある。

(奥村一郎)

十四世、喜多六平太

六平太翁が夕陽丘に移住されたのは戦後早いときだった。場所は今ア
ルカシヨンのあるビルから小路に沿って三軒の家のある所までの細長い
土地に木造和風の平屋であった。

一九四六年(昭和二十一年)四月には芸術院会員に選ばれ(七十三歳)、
一九五三年には文化勲章を受章し、同時に文化
功労者にも選ばれた。

一九五五年(八十二歳)には、現在の鉄筋に
改築される前の「喜多能楽堂」が竣工し、記念
能で「翁」「羽衣」を舞い、同年には無形文化
財(人間国宝)認定第一号保持者になった。翁
は一九七一年一月十一日、数え九十八歳にて没
し、従三位に叙せられた。

翁はきさくな方で、町会の会合にも気軽に出席



喜多能楽堂

席されて、所望すると小謡の一つもやっていたものだであった。

翁は、女流棋士の最高段者林文子と結婚したが、実子に恵まれず、関西生まれの「実」氏を養子に迎えた。実氏は恰幅のよい堂々とした和服袴姿で下駄をはいた姿が目に残っている。その長男（長世さん）、次男（節世さん）も出入りしていた。ちょうど夕陽会の青年会「親交会」の面々と同年輩であったので、この二人の美青年を会合に招いたことがあった。話している時には普通だが、謡うときの声は腹の底から出されており、びんびんと障子に響いたので、さすがにプロは違うと驚いたものだ。

喜多実氏が十五世宗家を襲名し、没後「長世」さんが十六世を継いでいるが、病気がちとか。

しかし、能楽堂は門弟たちの演能で日曜日ごとに賑わっている。

（奥村一郎）

杉野学園創立者、杉野繁一・杉野芳子

■杉野繁一

杉野学園初代理事長。

一八八七年（明治二十年）生、一九七三年（昭和四十八年）没。

一九一六年（大正五年）米國スタンフォード大学卒業。杉野学園初代理事長として学園の発展を図った。

また、全国洋裁学校協会連合会会長、各種学校連合会会長、私学教職員共済組合運営審議委員、日本私立短期大学協会理事、東京都私立短期大学協会理事、ドレスメーカー服飾教育振興会会長、東京都洋裁技術検定協会会長などを歴任。

多年私学振興に寄与した功績で、紺綬褒章、勲三等瑞宝章を授与された。一九七三年（昭和四十八年）二月二十一日逝去に際し、正五位に叙せられ、銀杯を下賜された。

杉野繁一は愛知県立津島中学校を出て、渡米し小学校に先ず入学し、



杉野繁一氏

ポリテクニクハイスクールを経て、スタンフォード大学で土木・建築を専攻し、一九一六年（大正五年）卒業後、ニューヨークセントラル会社（鉄道関係）に就職した。ニューヨークで勉学中の岩澤芳子と出会い、翌大正六年暮結婚する。繁一三十歳、芳子二十五歳であった。大正九年、フアーグソン建築会社東京支社勤務を勧められ帰国する。繁一は、マツダランプ、フォードの工場、日本電気社屋などの建築で手腕を認められ、昭和四年、コーンプロダクト会社の工場十数棟の建築のため、朝鮮の平壤（現ピョンヤン）へ二年間の長期出張をする。

一方、芳子の創立したドレスメーカー学院は、開校から六年目となり生徒数が増え、新しく校舎を増築しても教室がすぐ一杯になり、校舎の建築や経営面も重要な大きい仕事になってきていた。昭和六年、芳子は平壤におもむき、理事長として学校経営を担っていただきたいと繁一に懇請した。繁一は、自分の仕事に生きるか否かについて迷い苦しんだあげく、学園への協力を承諾し、昭和七年より、理事長として学園の仕事に専従する。「経営第一歩における理事長としての方針は、この学校に入学した生徒には絶対に失望させないで、満足して卒業してもらおうこと」

と学園内に宣言し実行に移した。教室の増設・校舎の新築・土地の買収（八〇〇坪のススキの原）などが急ピッチで進められ管理運営面を充実させた。しかし昭和二十年五月二十四日の空襲によって、自宅を残して千坪近い校舎は灰燼に帰してしまった。

戦後いち早く学校の再開を決意するや、得意の建築技術を生かして校舎の再建に力を発揮した。再開時生徒数は約二千人、それから生徒の増加に伴う拡張に次ぐ拡張に努力する。

戦後数年間は、木造の校舎・寮を次々に建てた。

杉野繁一・芳子が私財を投じ、杉野学園は、財団法人を経て、昭和二十六年短期大学開設に伴い学校法人とした。短期大学開学に当たり、校地（現大学校舎・短期大学部校舎敷地等）・校舎の充実への大きい努力を払った。

戦禍による木造の建物の持つもろさで苦い経験を舐めた繁一は、昭和二十八年の短期大学校舎の建築からは、すべての校舎・寮など十数棟の建物を鉄筋建築として竣工させた。

昭和三十九年には、将来の大きな目標であった、四年制大学を開学し

た。

昭和四十年、財団法人ドレスメーカー服飾教育振興会を私財により設立した。当法人の目的は「わが国の衣生活の改善および合理化に資するため、服飾教育に関する調査研究、研修助成事業等を行うことにより、服飾教育の振興を図り、もって人類文化の発展に寄与すること」としている。

■ 杉野芳子

ドレスメーカー学院創立者、同学院院長、二代杉野服飾大学短期大学部学長、初代杉野服飾大学学長、杉野幼稚園長、二代杉野学園理事長。

一八九二年（明治二十五年）生く一九七八年（昭和五十三年）没。

一九〇七年（明治四十年）千葉県立千葉高等女学校を卒業。米国に遊学し、帰国後、わが国服飾教育の草分けとして、ドレスメーカー女学院を創立。院長として服飾教育に専念するかたわら、作品発表、新聞、雑誌、放送などを通じて広く服飾文化の向上に寄与した。

多年の服飾教育の功により、藍綬褒章、勲三等瑞宝章を授与され、フ

杉野芳子 氏



ランス政府より教育文化功労章のクロワ・ド・シュバリエ勲章を授与された。一九七八年（昭五十二年）七月二十四日逝去に際し、正五位に叙せられ、勲三等宝冠章を下賜された。

創立者杉野芳子は日本に洋装を普及・定着させたパイオニアだといえる。自立した女性、「職業婦人」を目指し、一九一三年、単身、着物に袴姿で米国に渡る。やがて米国で生活する中で必然的に洋装せざるを得なかったが、日本人との体型の違いから既製服を着ることができない。そこで自分に合う洋服を作り始める。帰国後は日本の女性にも洋装を広めようと、東京・芝にドレスメーカー・スクールを開設した。一九二六年四月、時代がまさに昭和へと移り変わろうとする時であった。当初、集ったのはわずか三人。この学校は一週間でやむなく閉校となってしまいうが、継続を望む生徒らの熱意に打たれ、自宅を教室にして引き続き指導することになった。同年十一月には現キャンパスの品川区上大崎の地に移って再び開校、校名もドレスメーカー女学院と変更する。

芳子は、院長として服飾の教育と研究をすすめ、日本人の体型に合ったドレメ式原型に基づく教授法の開発、ファンデーションドレスの学習、

立体裁断の導入という服作りのプロセスを体系付けていく。学園創立十周年にあたる昭和十年に、わが国で初めて自らの創作によるファッションショーを日比谷公会堂で開催。大きな反響を呼ぶ。同時にデザイナーとして世に出る機会ともなった。さらにデザイン教育へと進展をはかり、そのレベルも国際的に認められるものとなった。

その後は戦時下にあっても、活動しやすい洋服を着るために洋服を身につけておきたいという女性が引きもきらず、入学者は増え続けた。一九二三年の関東大震災や一九三二年の白木屋デパート多くの女性が亡くなったことは、人々に洋装に目をむけさせることになったようだ。

戦争で校舎が全焼し、戦後はまさに廃墟からの復興となった。終戦後一週間も経たないうちに学院の再開を訴える生徒たちの声が澎湃^{ほうはい}として湧き起こり、一九四六年には本格的に授業を再開した。戦後の洋裁ブームの中で学園は発展の一途をたどった。一九五〇年に杉野学園女子短期大学被服科を設立、一九六四年には杉野学園女子大学家政学部被服学科を設立した。

新作作品のファッションショーは、視覚に訴える教育を重要とする杉

野芳子の大きな業績の一つで、生涯にわたり年々積み重ねられてきた。研究活動の足跡を辿ることのできる遺作品は、学園に保存され、現在の教育研究に生かされている。

杉野芳子が生涯を通じて取り組んだのは、「日本の社会への洋装の普及定着とモードの創出、基盤となる服飾教育の確立」であった。学園創立十周年のファッションショーは、大きな反響を呼び、昭和という洋装の時代の幕開けを告げることになった、その意味から服飾の世界で昭和の時代の形成者でもあった。

(杉野秀子)

小児科医、玉木正季

「玉木先生にはたいへんお世話になりました。本当にやさしくて、良い先生でしたね」

父が小児科を廃業して十二年、亡くなつて三年たつた今でもときどき、ドレメ通りで出会う方たちに、私はこう言われる。

そう。父は心優しくして無類の子ども好き。チョウ勤勉で真面目。ちよつと偏見持ちで頑固な面もあるけれど、気が小さくて心配性。神様と仏様に毎日欠かさず手を合わす、根から善良な人であつた。

父は、一九五五年、ここ上大崎四丁目二三五番地で小児科医院を開業した。幼稚舎から慶應に学び、医学部卒業後は東京女子医大講師、二度の出征。青森医専教授を経て、戦後は小児科医として大船共済病院に勤めた。そして、当病院の副院長の時に開業を決意したのである。

ここに来る前、私たち家族は、神奈川県藤沢市鶴沼に住んでいた。父は病院勤め、母は専業主婦、娘二人は湘南白百合学園に通う、平和な生

活であった。

ところが、厄年四十二歳の父が開業を決意。家族の生活は急変した。母は家事以外のことにはたいへん行動的で頼もしい人だ。四丁目の椎野さんの離れ一角の土地を見つけてきたのも母だ。母の実家の白金に近く、また、玉木の伯父の土地も権の助坂一帯に広く残っていたので、なんとなく親近感があったのだろう。路地奥にもかかわらず、迷わずに決めたようである。住んでいた家と土地を手放しての転身である。

開業当初は、場所が人目につきにくいせいもあって、なかなか患者さんが増えず、苦勞したようだ。母も診療の手伝いをさせられ、「ママは開業医のお嫁さんになる気はなかった。大学の先生の所にお嫁に来たはずなのに……」が口癖であった。

しかし、父の誠実な人柄もあって、口コミで徐々に患者さんが増えていった。

父は実によく働いた。日曜日も休日もなかった。急な患者さんを心配して、私的な外出を極力避けていた。午前中は診察。午後は往診。帰宅後は夕方の診察。私が大学生になった頃には車を購入したが、それまで

はほとんど徒歩だった。だからこの界限、品川区、目黒区、港区の小さな路地裏までも、実によく知っていた。

こうして、父は八十歳まで診療を続け、「玉木小児科医院」はこの地域の皆様のお医者さんになった。「小児科医」と看板を出していたけれど、家族全員の病氣治療、健康管理、つまり皆様のホームドクターであったと思う。

検査、検査の今の医療とは違い、問診重視。子どもの持つ自然治癒力を大事にする治療法。注射は嫌い。「三日もすれば熱が下がるから、あまり心配しないで」などと、心配するお母さんをなだめながら、時には注射や薬を要求するお母さんに、「医者はどうちだ」とちよつと腹を立てたりしていた。一方で、必要がある時は患者さんをいつまでも自分で抱え込まず、設備の整った大病院に送る判断も適切であったように思う。

そのような父の姿勢が、品川区医師会会長として、開業医と関東通信病院との連携システム確立に奔走させたのかもしれない。余談になるが、このことで、父は八十歳の時に「勲五等」の勲章をいただいた。

父はこの夕陽丘のメンバーであることに、とても誇りを持っていた。

「このあたりには、蒼々たる方達がたくさん住んでいらつしやる。私の患者さんは、すばらしい方たちばかりだ」とよく言っていた。

その思いが強かったのか、町会内のアンセルモ幼稚園の園医や、杉野女子大の講師、雅叙園観光ホテル、東急電鉄の嘱託医なども積極的に引き受けしていた。

最近つくづく思うのは、地域に必要なのは、「玉木小児科」のようなホームドクター。何でもありの町のお医者さん。やたらに検査ばかりして患者の心配を煽るのではなく、親身になって患者の相談に乗ってくれる町のお医者さん。

そのような先生をどうか私に紹介してくださいませんか。

(佐藤久美子)

刻字家、長揚石

私が現在の住居へ移り住みましたのは、一九八七年（昭和六十二年）の暮れも押し詰まった十二月の二十八日でした。

港区の新橋という古きよき下町の心を残す商店街と時代の先端を行くオフィス街の混在する中で生まれ育った私にとって、住宅地である上大崎という環境は新鮮である反面、かすかな不安も感じておりました。住宅工事中のご挨拶から引越しをしてきた時の近隣の皆様へのご挨拶の中で、心暖かな良い方々との出会いに家族一同大変喜んだものです。そしてなかでも温厚で気品があり、かつ江戸下町の粋を感じる長谷川清様ご夫妻が、「書」と「刻字」の大家で在られることを知ったのはその後だといふ経ってからのことでした。

今は亡き長揚石先生（本名・長谷川清）は、日本書道界での刻字分野の代表的存在であり、第十五回毎日書道展での刻字部門の独立をはじめとして、日本刻字協会会長、国際刻字連盟初代会長として刻字の国内お

よび海外への普及と交流に尽力され、協会の発展に多大な功績を残しておられます。

長先生は「刀魂の芸術」刻字と題し「刻する」という行為は人間本来の本能的な表現欲求の一つであり、その表現はダイナミックであり、そこには人間の知性と感性を肉体的な条件の中でのしむことができる。と説き、特に自分の字を自分で彫る現代刻字では「刻する」中に現れる知性と感性を重要視すると共にその基本となる「書」の大切さ、多くの古典に親しむこと、文字についての時代性、説文解字など総合的知識を身につけることを指導されました。また社会になじむ実用に即した「用美」を大切にした作品の創作を先駆され、中でも「釜中魚」は装飾性とノミの切れ味を前面に出した代表作のひとつであり、現代的で清楚な風をよくし多くの刻字ファンを魅了しました。

長先生は東京日本橋生まれで江戸っ子気質あふれる方で、一九六五年（昭和四十年）にこの町に転居されてきました。当時より若い書家の育成に大変に熱心で、駒澤大学の書道部の学生の多くを自宅に寄宿させ、寝食をともにして、刻字の探求と人間形成の指導に明け暮れたそうで

す。現在、この時の若い学生たちが書家として長先生の遺志を継ぎ、日本刻字協会の幹部としてその中枢を担っていることは言うまでもありません。

私が長先生の作品をはじめて拝見させていただきましたのは一九九一年（平成三年）頃でした。以前NHKテレビで放映された大河ドラマ「独眼流政宗」のタイトル文字を彫った実物でした。その作品を目の当たりにして身の震えるような強い感動を受けたことを今でも鮮明に憶えています。すっかり刻字に魅せられた私は、もう直門の弟子はとらないという先生に無理やり、強引にお願いし、その後に奥様のお口添えもあって弟子入りをお許しいただき、ご指導を受けられるようになりました。

直門のお弟子さん方は書家として既に著名な方々ばかりで、しかもご自分で教室をもって多くのお弟子さんを指導している立場の方々でした。素人は私一人で随分迷惑なことと今さらながら恥じております。

先生の稽古は厳しく緊張感の張り詰めたものでしたが、反面その人柄は遊び心を持った軽妙洒脱な方で、私は先生の話を聞くのが楽しみで稽古日が待ち遠しかったものです。弟子の方々の思いも同じようで、ご自

分たちの稽古が終わってもなかなか帰らずに、夜遅くまで残って話を聞いていくのが常でした。

私は、一九九四年（平成六年）に初めて毎日書道展への出品を許可され、その準備に取り掛かりました。この書展は書家にとって自分を世に出すチャンスであり、力のこもった作品が多く出品されてきます。私にとって初の大作であり、撰文、書体、書風に創意工夫の想いをめぐらせ、全体の書稿を完成させ刻みに掛かると、気力、体力勝負の大仕事になることは覚悟していました。私は若い時より腰痛の持病があり、ちょうどその時期に日常の生活もおぼつかないほど最悪の状態で困り果てていました。

そんな時、突然に先生より電話をいただきました。多分、奥様がお話くださったのだらうと思います。「腰が痛いんだって、そんな状態では良い作品が出来ないだろう、自分の行きつけの針灸院で良く効くところがあるから治療を受けてみなさい」とのこと。早速、先生のお宅に腰を九の字に曲げてお伺いすると、自ら愛車のBMWを車庫より出し運転をして連れて行ってくださいました。

先生は数年前に心臓の病で倒れ、血管のバイパス手術をしており、普段でも歩くことを避けてチョイと出かけるにもバイクを運転して活動しておりました。そのような身体でありながら、私のような未熟な弟子に對しての思いやりに妻とともに感謝の気持ちで一杯でした。お蔭様で針の効果はてきめんで、作品作りに心身ともに万全の態勢で臨むことができました。

一週間後に先生に書稿の最終チェックと指導を夜遅くまでしていただきましたが、この時には翌朝、長先生の突然の訃報に接することになるとは思いもありませんでした。初めての毎日書道展への出品作品の完成を見ていただけなかったこと、また、入選のお知らせをできなかったことが返す返すも残念でなりません。

作家としての自覚は自己の作品の市場性にも大きなかわりがあるとの観点から刻字の新しい局面の開発を目指していた長揚石先生。私自身未だ努力が足りず、十分な研鑽もできずにいる身を恥じております。

長先生がこの町に居らずに、また私がこの町に転居してこなければこの「刻字」との出会いは永遠になかったかもしれませぬ。縁あってこの

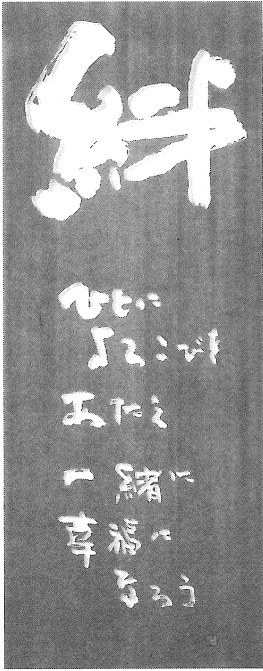
町に来て、縁あって出会った人々と面白く楽しく協力しあって暮らしてゆくことが、子供の代にも孫の代にも続いていければと思います。

今年の作品は、

「絆 ひとによるこびをあたえ 一緒に幸福になろう」と刻しました。

私は、この町をこよなく愛しております。皆様とともによりよい夕陽ヶ丘町会にしたいと思っております。

(藤井清一)



貿易庁長官、塚田公太

塚田公太氏は日本経済新聞の「私の履歴書」によると、一九四〇年（昭和十五年）、夕陽丘に家を買って家族を住ませ、自分は甲子園ホテル、戦争末期は宝塚ホテルで暮らしていたとある。

公太は一八八五年（明治十八年）九月二十七日、新潟県中頸城郡鳥坂村大字姫川原（現在新井市）で生まれた。父は次男のため分家して家屋敷と田畑をもらったが、米麦、大豆を扱う雑穀商をやり、みそ、しょうゆを作ったり、酢を仕入れて売ったりしていた。そんな家庭の環境から、小さいときから商売人になろうという気持が自然に出てきたという。

小学四年高等小学四年を終えると、高田中学と有恒学舎（儒学者が作った私学）と両方受かったが、当時は体が弱かったので家のものが近くの有恒学舎へ行けというので三年の間、増村校長から修身の授業を受けた。これが感じやすい年頃の公太の人間形成の基礎を作った。初めから一橋を目指していたので田舎の中学では無理と思ひ有恒学舎の三年を終えて

から東京の京北中学の五年に編入した。有名な斉藤秀三郎の正則英語学校に通ったりして、準備を整え無事「東京高等商業学校」に入学できた。

当時の青年の多くは、「藤村操」が華嚴の滝に飛び込み自殺をしたように、人生とはなんぞやとの疑問をもっていた。一橋には禅をやる者があり、円覚寺、浅草海禅寺など夏冬春と三回参禅したが、大変なクスリになったとあり、菅礼之助等と禅の一橋如意団を作った。後年、暑いボンベイでの社宅生活でも少しも苦しまずに過ごせたのも禅の功德だ。

一九〇七年（明治四十年）に卒業すると、三井物産に入り綿花部に配属された。ボンベイに約十五年勤務した。その間綿花部は独立して東洋綿花となり、大阪本社に帰って累進して社長（会長）になる。統制で貿易庁長官になる。追放を受け解除されてから、倉敷紡績の社長に迎えられた。

晩年、会長になってからは、財界活動のため、東京に住むようになった。飾らぬ人柄で、道で出あっても気さくに挨拶された。お葬式は禅式で、香典花などを一切断った簡素なものであったことが印象に残っている。

（奥村一郎）

写真家、長野重一

長野氏は、一九二五年大分に生まれたが、幼い頃に東京に移り、慶応義塾の幼稚舎から大学の経済学部に進み、慶応フォトレンズ部（写真部）に所属した。一九四七年（昭和二十二年）名取洋之助に勧誘されて「週刊サンニユース」の編集者になり、一九四九年「サンニユース」が廃刊になったため「岩波写真文庫」のスタッフとなった。五四年同社を退社、以後フリーランスの写真家として活動する。五十年以上のたゆまぬ活動は、写真、雑誌、書籍、TV映画と多岐に亘り、膨大な映像を所蔵している。恵比寿ガーデンプレイスの写真美術館のパソコンで検索することができる。

数々の受賞を受け、紫綬褒章、勲四等旭日小綬賞を受賞している。

現在、長野重一氏の住んでいる場所は、名取洋之助氏が終戦後すぐに、弟の持っていた土地に家を建てようとしたが、建前のすぐあと不審火によって焼けた。それで国府津の別荘を移してそれに建て増したもので、

家族が五、六年住んでいたが、伊達町に自宅を新築したので、長野氏に譲ったものである。

(奥村一郎)

【注】 名取洋之助は一九一〇年生まれ。名門の子弟であったが、勉強が嫌いで、中等部卒業の見込みなく十七歳で母親付でベルリンに留学、パウハウスでカメラに自分の才能を発見した。縦横無尽に国際的に活躍し「ライフ社」の契約写真家にもなった。戦後、「サンニュース」で報道写真とは何かを弟子に厳しく指導した。一九六二年胃がんで死去。

〔参考文献〕

三神実彦『わがままいっばい名取洋之助』ちくま文庫

冬季オリンピック選手、南洞邦夫

南洞氏の父君、孝さんは岩手県平泉出身、代々天台宗毛越寺（もうつうじ）の貫主を努める名家で、父南洞頼賢の次男。一九〇二年（明治三十五年）に盛岡中学を経て清国上海市の東亜同文書院に入り一九〇五年六月卒業。時の外務省の指示で清国奉天市（現瀋陽市）高級学校の教師になった。直前の三月十日の日露戦争大会戦は奉天市南郊で戦われたので同市は戦火を免れていた。

邦夫氏は一九一六年（大正五年）十二月五日奉天で生まれたが、本籍は平泉町にある。小学校、中学校（奉天第一中学）からスピードスケートの選手として頭角を表し、諸大会に出場した。

早稲田大学に進み、全日本選手権大会、全国学生選手権大会、明治神宮大会などで短中距離で度々優勝した。

早稲田在学中の十九歳で、ドイツ・オリンピックの冬季大会（一九三六年二月、ガルミツシュ・パルテンキルヘン）に日本代表として、

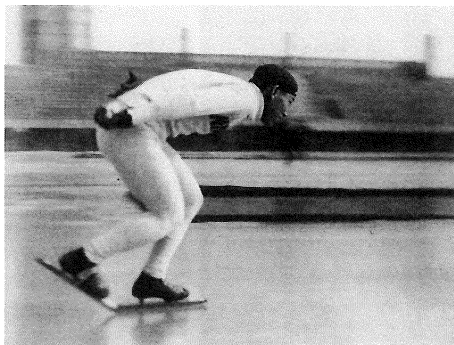
五百、五千メートルに出場した。一九四〇年札幌の冬季オリンピックの代表選手に選ばれたが、オリンピックは取りやめとなり、幻となった。

同年早大商学部を卒業して、新京市（現長春市）満州中央銀行に入行、終戦を迎えて一九四六年帰国した。東京靴下株式会社に入り、要職を歴任したが、スケート界との繋がりは強かった。

一九五四年一月の札幌市で開催の男子世界選手権大会、一九五六年イタリア冬季オリンピック大会（第七回、コルチナダンペッツォ）、一九六〇年アメリカ（第八回、スコーパー）等の日本選手監督を務める。最近では一九九四年、ノルウェーで開催の（第十七回、リレハンメル）冬季オリンピック大会では日本代表選手団団長となり、金1、銀2、銅5、入賞16を獲得した。

この間、(財)日本スケート連盟理事長、東京都スケート連盟会長等を歴任、また、母校の講師、監督等を務めた外、(財)日本体育協会、(財)日本オリンピック委員会（JOC）にも関わった。

会社を辞めた一九八五年には、請われて日本では新しい氷上競技の(社)日本カーリング協会二代目会長に任じ、オーストラリア、ニュージーラ



氷上飛燕の姿

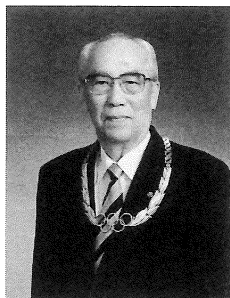
インド、韓国、台湾、中国等を統べるパシフィック連盟を組織、地域大会を開催するなど、世界連盟の発展に貢献した。西欧で四百年の歴史を持つこの競技の地域拡大と発展への寄与を評価し、国際オリンピック委員会（IOC）は、カーリング競技を一九九八年長野市で開催の第十八回冬季オリンピック大会で正式競技に採用し、同委員会と同時に氏にオリンピック・オーダー（勲章）を授与した。

これより先、一九九四年に国は南洞氏にスポーツ界振興多年の功績を称え勲四等瑞宝章を授与している。ちなみに、ご夫人も戦前フィギュアスケートの名選手として日本選手権大会等に出場している。

十九歳時代の氷上飛燕の姿と、受賞のプロフィール（胸の五輪マーク）を掲載します。

（奥村一郎）

オリンピック・オーダー



海軍中将、堀悌吉

「堀悌吉」とは誰で、何で夕陽ヶ丘町会と関係があるのだろうかと思われ
ることでしょう。私が東京の府立一中に入学し一年甲組に配属になって、
堀正という生徒と同じ組となった。堀が三人もいたので、我々は彼を「ホ
リセイ」といって区別した。オデコが大きかったので「ホリデコ」とい
う綽名もあった。

このホリセイが稀代の悪童であってクラスの人気者だった。声が低音
で話し方に独特の魅力があったので、皆が話を聞きたがった。弓道部に
いたが、カバンを射って弁当箱に穴があき、持ち主の下級生が教員室に
訴えたので、始末書をとられ、アンパンをくわえながら校庭を横切った
ところを見つかって始末書。始末書三枚で退校とかの噂で、我々は大い
に心配した。

中学一年のときに、彼の家に遊びに行った。お父さんが海軍らしいと
は漠然と知っていたが、姉さん方は学校から帰っていない、お母さんに

も会わなかったから、病気だったかもしれない。何となくガラソンとした家で、応接間のような洋間の棚に賞牌のようなものがあったようだが、ピアノがあつて、彼がポロンポロンと弾くのにはびっくりした。

勝山の臨海団で彼が岩の上で「オーソレミヨ」やさまざまな歌を歌うのに聞きほれたこともあつた。彼がいかに人気があつたかは、中学入学五十年の記念誌の索引に三十一回出ており、トップであることでもわかる。戦後、彼が結核でなくなったことと、父親が堀悌吉海軍中將であつたことを知つた。

それで宮野澄の『不遇の提督堀悌吉』（一九九一年）を買つて読んでみた。それによると、堀悌吉は日露戦争で敵艦の将兵が多数死んだことに、シヨックを受け「戦争は絶対悪」との信念を曲げず、一生を貫いた軍人で、日米戦争を阻止するため、軍令部員として、テロの危険に曝されながら、山本五十六、井上成美、山梨勝之進、左近司政三らと、東郷元帥を戴く艦隊派と戦つたが、昭和九年、海軍部内の条約派は敗れて、堀悌吉、山梨勝之進、左近司政三は休職待命になつた。それから日本は戦争準備に入り、山本五十六を連合艦隊司令長官に、井上成美を第四艦

隊司令長官にして、戦争を始めて、その結果は、惨めな敗戦となった。

堀悌吉は音楽が好きで、邦楽は長唄、端唄、小唄なんでもこなした。堀正が歌がうまく音楽が好きだったのは、父悌吉の遺伝だったのだ。

戦後、夫人はすでに無く、長男正も病死し、恩給も停止になった堀悌吉に同情した同郷（杵築）の東條久四郎氏が、自分の経営する「＊関東商工」の顧問として迎えたので、週に何日かは目蒲線の目黒駅前＊の会社に通っていたのであった。

二〇〇一年（平成十三年）晩秋、杵築を訪問した。城跡の資料館に杵築中学（大分中学の分校が独立）の卒業生、第一回生堀悌吉、第二回生重光葵、第三回生豊田副武（連合艦隊司令長官）と錚々たるものだった。堀悌吉はパリに武官として駐在し、その後も日仏交流に尽くし、レジオンドヌール勲章を貰った。彼は最後まで手元を離さず、没後遺族が臼杵高校に寄付した。

※東條氏が同郷の紀脩病院長から土地を譲り受けて、会社の建物を造った。

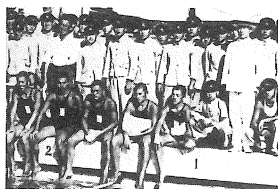
（奥村一郎）

構造設計の大家、松井源吾

松井源吾さんは一九二〇年（大正九年）佐渡の真野で生まれた。松井先生の生家は素封家で、祖父は北海道の寿都で呉服、味噌醤油、海上運送、等々を営み、衆望に答えて町長、衆議院議員を各一期務めた。日露戦争の時の議員ということで、勲四等旭日小綬章を受けた。父は村会議員、県会議員を三十年余り勤めた。その功勞により、勲四等を受けた。しかし、松井先生は大学の教務部からの叙勲申請を断ったのである。

これで分かるように、先生は大変ユニークな方であった。佐渡中学では水泳部員として練習に励み、五年で主将になったが、四年の時の県大会の成績が悪かったので松井君は、奇策を考え、各校とも背泳に良い選手がいけないことに目をつけて、本来はクロールの松井と副主将が背泳に出場して1、2位を占め、総合で2位となった。

松井が部に入った時はプールがなく、グラウンドの隣の泥池で練習し、蛇に鉢合わせしたこともあったそうだ。佐渡中学にプールが出来て前記



賞状を持っている松井源吾青年となりは副主将山本泰雄君

の大会で2位となり、以後続けて2回優勝しているのは、松井等先輩の薫陶の賜物だと言われた。

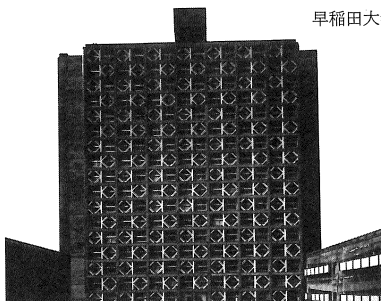
松井は、大会に出た後、八月に学校を中退した。しかし、翌昭和十三年（一九三八年）四月には早稲田の第一高等学校に入っている。たぶん東京の予備校で勉強したのであろうが、そこにも肩書きに捉われない先生の面目がうかがわれる。

理工学部建築科に進み、繰り上げ卒業（一九四三年）し、その後、大学院特別研究員、専任講師（一九四八年）、助教授（一九五二年）、工学博士（一九六〇年）、教授（一九六一年）となり、定年退職五は名誉教授（一九九一年四月）として活躍した。

松井先生は一九六八年に建築学会賞を受賞された。これは筋交いを高層建築（十八階）前面に美しく見せた早稲田大学理工学部51号館の設計のユニークさが評価されたものである。

それから二十五年後の一九九三年には「建築構造に関する研究・設計・技術指導の総合的業績」で二度目の学会賞を受けられた。その一は「中空スラブの発明、二は流線梁の発明、三は木造大スパン構造の開発であ

早稲田大学理工学部51号館



る。いずれも著書や講演等で普及につとめられ、大きな経済的効果もたらした。

「松井源吾先生は早稲田大学を退職されたのを記念して、先生ご自身と関係者の協力によって一九九〇年に松井源吾賞を創設された。「若い構造設計者を励まし、建築界の発展に寄与することを目的に創設されたものである。優れた建築作品に対して意匠関係の設計者には、さまざまな報奨制度があるが、構造設計者には陽のあたるものがほとんどなかった。今まで十五回、三十一名の方々が登場された。この賞も十五回を区切りとして本年度終了することとなり、このたび、すべての受賞作品がまとめられて出版された。この間、受賞された方々の建築界における活躍は目覚しく、一般の方々にも建築における構造設計の担う役割の重要性はかなり高く評価されるようになって来ている。」（間瀬淳平編『松井源吾賞作品集』より）

最後の賞に夕陽丘に事務所を持つ金箱構造設計事務所の金箱温春氏が選ばれたのも、奇しき因縁である。賞の対象になったのは「新潟市立葛塚中学校」の構造で安藤忠雄氏の設計である。曲面を多用した建築で校

舎はPCコンクリート部材の現場組み立てであり、その耐震を鉄骨と鉄筋コンクリートのコア（階段室）に負担させてPC部材のサイズを軽減した。また、体育館は木造でその組み立てにはいろいろな工夫をした。デザインのユニークさを構造で実現したものである。

松井先生は大変な好男子だった。夕陽丘健人会が主催した先生の講演会に来たある夫人が「一代で出来る顔じゃない」と。先生は色々の会をやるのが好きだったようで、ファンだった司葉子さんを招いて会を盛り上げたりした。

松井先生は佐渡の自宅の半分を残して改造し、平成五年の夏から住所も佐渡の真野町に移されたが、佐渡と東京を毎月往復するのが、健康を害された原因となったようだ。平成七年夏、肺癌の手術のあと秋は元氣となられ、その間、かねて交際のあった同郷の政枝さんと結婚。年末に再入院され、平成八年一月十一日容態が急変して、亡くなられた。享年七十七歳。

没後、正五位、勲三等瑞宝章を受けられた。

（奥村一郎）

杉野学園卒業生の活躍

女性の自立を身をもって示した杉野芳子のもとに学んだ卒業生は、洋装の知識と技術・感覚を、当初から衣生活にそして、洋裁を専門とする職業にと積極的に役立ててきた。

今でいう起業家意識が旺盛な卒業生は、戦前戦後を通じて地元に戻るのとドレスメーカー学院の系列校として、次々と全国各地に洋裁学校を開いた。このことは洋裁の普及の大きな推進力となり、洋裁ブームに拍車をかけた。ピーク時（一九四九年頃）のドレメ系列校は約八百校を数えた。この方たちは洋裁教育だけに止まらず、それぞれのエリアでファッション関係の仕事の中心的な役割を果たされている。

第一線で活躍できるデザイナーの育成を目指していた杉野芳子は、優れた才能と高い技術をもつ若い人たちを、続々と世に送り出すなかで、若い才能が日本の狭い枠から飛び出し、世界に羽ばたくことを望み、卒業生を中心とする日本の若いデザイナーたちの技量が、世界でどれだけ

の評価を得られるのか確かめたいと思いつづけていた。

一九五四年（昭和二十九年）、全国公募デザイン審査を世界のトップデザイナーに依頼した。審査を依頼したのは、当時のパリオートクチュールの中心的なデザイナーのジャン・デゼー、ピエール・バルマン、ジャック・ファットや『マリーフランス』編集長サビーヌ女史の各氏、翌年には、クリスチャン・ディオールに依頼した。審査の結果、すべての大賞を学院のデザイナーが独占した。こうした若いデザイナーのグループが次々に結成され、長年に亘り広くデザイナーとして活躍した。

一九五六年（昭和三十一年）十一月九日の「毎日新聞」は沓木玲子のニューヨークファッション界へのドラマチカルな登場を報じた。「パリとともに世界の夫人の『流行を作る』といわれるニューヨークのファッション界で、無名の一日本女性のデザインしたドレスが、モナコのグレース王妃の目にとまり、早速買い上げられた。その後は続々と注文があったというので、ニューヨークのファッションデザイン界に一大センセーションをまき起こしている」というものだった。

沓木玲子はドレメ卒業後、一九五三年（昭和二十八年）アメリカに渡り、